真実の善知識

――善知識釈を中心として――

三明智彰

一

善知識との値遇なくして仏教はない。

いかに仏教についての緻密な研究が行なわれ高尚な理論・整然たる学の体系が構築されようとも、また厳しい修行実践が強調されようとも、もし善知識との値遇がなければ、それは仏道を開示するものとはならない。誠実に自己を問い、自身を内観することがあっても、善知識との値遇がなければ、仏道とは似て非なるものである。『歎異抄』には

幸不レ依二有縁知識一者、争得レ入ニ易行一門一哉。全以二自見之覚語一、莫レ乱ニ佗力之宗旨一。（前序・蓮如本）

と言っている。この「有縁の知識」が真の善知識である。

親鸞は、善知識を、「日の正道を示すが如し」（『教行信証』「化身土巻」・善知識釈）と示されている。善知識ましまさずば、正道・邪道の別を知ることは不可能であると。しかし、我々がそのような善知識に遇うことは、はなはだ難い。『大無量寿経』流通分には

如來興世、難二値一難二見一。諸仏經道、難二得一難二聞一。菩薩勝法諸波羅蜜、得二聞一亦難。遇二善知識一聞二法一能行、此亦爲二難一。若聞二斯經一信樂受持、難中之難無過二此一難一。是故我法、如二是一作。如二是一說。如二是一教。應下當信順一如二法一修行上。（「化身土巻」・親全一―三〇二の訓点による）

と説かれている。私はこの御言に世尊の遺言の響きを感じる。『大無量寿経』は、教主釈尊が、「如来の興世値い難く見まつり難し。」・「諸仏の経道得難く聞き難し。」・「菩薩の勝法諸波羅蜜、聞くことを得ること亦難し。」・「善知識に遇ひ法を聞き能く行ずること、これ亦難しと為す。」・「若しこの経を聞きて信楽受持すること、難の中の難、これに過ぎて難は無けむ。」と、「難」を明らかに見そなわしたもう故に、「是の故に我が法、是の如く作しき。是の如く説く。是の如く教ふ。」と開示された教法である。その故に「まさに信順して法の如く修行すべし」と勧励される。経に「痛不可言」と教主釈尊が、衆生の迷いの現実を痛んで発せられた言葉がある。この流通の御言は、まさに如来の痛みから出された教勅である。「難」を知るが故に、衆生に真実の教法を開示する、これこそ「真実の善知識」（「化身土巻」善知識釈・親全一―三〇五）の仕事である。

「化身土巻」の善知識釈を披くとその初めに、右に掲げた『大無量寿経』の文が提示されている。これは、善知識釈の総説である。後の『涅槃経』・『華厳経』・善導の釈文は、その意を承けて、かくの如き「難」の所以と善知識の出世化導の意義を探ってそれを開示するものであると見ることができる。そして右の文の次につづいて、

『涅槃經』言、如二經中說一、一切梵行因善知識・一切梵行因雖二无量一、說二善知識一則・已・攝盡・如二我所說一一切惡行邪見・一切惡行因雖二无量一、若說二邪見一則已攝盡。或說 阿耨多羅三藐三菩提信心爲二因一。是菩提因雖二復无量一、若說二信心一則已攝盡。（親全一―三〇二）

と示されている。「一切梵行の因は善知識なり。一切梵行の因無量なりと雖も、善知識を説けば則ち已に摂尽しぬ」と、善知識の絶対的意義がまず示される。それに対して、「一切悪行は邪見なり。」と言う。仏道を妨げるものを邪見

と見定めている。これが「難」の原因である。この邪見が実に様々の姿・形を取ってあらわれるのである。その正体をはっきりと見定めなければならない。次に、「阿耨多羅三藐三菩提は信心を因と為す。是れ菩提の因また無量なりと雖も、若し信心を説けば則ち已に摂尽しぬ。」と示される。この信心とは、端的に言えば「一切梵行の因」たる善知識の仰せをかぶりて信ずることである。邪見に対するのが信心である。真実の信心には、邪を批判する智慧が具っている。それがない信心なるものは、たとえ「信心」という名があっても、それは「不具足信」（「信不具足」の文の結びの言葉・「化身土巻」・親全一―三〇三）である。「信心」ということの中味が問われなければならないのである。

親鸞はこれについて、「信不具足」・「聞不具足」の問題を提起している。また、「真実の善知識」という語を出している。私は、「信不具足」・「聞不具足」とはどのようなことなのか。また、なぜ「善知識」の上にわざわざ「真実」という語を冠して「真実の善知識」と言われなければならないのかをたずね、親鸞の「信不具足・聞不具足観」と「善知識観」の一端を窺い、以て親鸞の教学の精神に触れたいと思う。特に、『教行信証』「化身土巻」の善知識釈を中心として考えて行きたい。

二

前節で挙げた「信心為因」の文に続いて、「信不具足」・「悪果を獲得する四善事」・「戒不具足」・「聞不具足」の文が挙げられ、直前に示された「難」の原因である「邪見」のはたらきを究明している。それは、信心を名のりながら非信心化し、聞を名のりながら非聞に堕し、仏教を名のりながら非仏教化する危機を明らかにするものである。これらは、『涅槃経』から引かれたものであるが、大きく前後が入れ替り、また現存の大蔵経とは文字の異る所がある。その上文意が領解しがたいので、先学方は苦心して、所引の文をもとの『涅槃経』に戻して解釈している例も多い。また、親鸞の書き誤りであろうとする説もある。

まず「化身土巻」所引と『涅槃経』（大正蔵第十二巻）の文とを、比較しておきたい。これらの文は、先学も既に指摘しているように、『涅槃経』迦葉品「恒河七種衆生の譬喩」の第二「暫出還没」の中に、「信不具足」・「戒不具足」・「聞不具足」・「施不具足」・「智不具足」という五つの不具足が次第して説かれている所からの引用である。『涅槃経』と「化身土巻」所引との大きな相違は、まず第一に、「信不具足」の文と「四善事」の文が入れかえられていることである。その入れかえた意味は何か、ということが問題になる。第二には、「化身土巻」では、「四善事」の文にすぐ続いて「乃至」も示さずに、

如來則有二種涅槃。一者有爲二者无爲。有爲涅槃无常。樂我常无為涅槃。有二常人一深信下是二種戒俱有中因果上。是故名爲二戒一、戒不具足、是人・不三具二信戒二事一、所樂多聞亦不具足。云何名爲二聞不具足一、……（以下略）……

（親全一―三〇四・傍点と「以下略」は筆者）

とあることである。（「有常人」に注意。）この文の前半は、『涅槃経』（大正蔵）では、「四善事」の文の七行後から始まり、「化身土巻」所引の「信不具足」の文の二行前で終わる文であるが、左記のように中途で切られている。

如來有二種涅槃。一者有爲、二者無爲。有爲涅槃、無常樂我浄。無爲涅槃、有常（樂我浄。）

（大正蔵十二―五七五中・傍点と括弧は筆者）

また、後半の文は、『経』では「戒不具足」の文の途中から「聞不具足」の文へと続くものであり、

（一者善戒。二者悪戒。身口意善、是名善戒。牛戒狗戒、是名悪戒。是）人深信是二種戒俱有善果。是故名爲戒不具足。是人不具信戒二事。所修多聞亦不具足。云何名爲聞不具足。……（以下略）……

（大正蔵十二―五七五下。傍点は「化巻」と異なる字）

という文である。この文が驚くべきことに「化身土巻」では、

有二常人一深信下是二種戒俱有中因果上。（親全一―三〇四）

と連って一つの文をなしていて、『涅槃経』とは全く別の意味を持つものになっている。

以上をふまえて、次に内容をたずねてみたい。まず「信不具足」は、四つの様相が示されている。第一に

雖復有信、不能推求。（親全一―三〇三）

である。第二には、

從聞而生、不從思生。（同上）

第三には

唯信有道、都不信有得道之人。（同上）

第四には、

雖信佛法僧寶、不信三寶同一性相。雖信因果、不信得者。（同上）

である。従来しばしば、「信不具足とは、信が不十分であること、信が完全でないこと」という領解が行なわれてきた。果してそうであろうか。私は、ここでの「不具足」を「不十分・不完全」と解釈することができない。「推求なき信」、「思なき聞」は、不十分なるものとは言えないのではないかと思う。「信巻」に

佛意難測、雖然竊推斯心（三心釈・親全一―一一六）

と語られている。また、

經言聞者、衆生聞佛願生起本末、無有疑心。是曰聞也。言信者則本願力廻向之信心也。

（「信巻」・親全一―一三八）

と示されている。「竊かに斯の心を推す」と言い、「仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし」と言われることが、真実の信心でなければならない。そうでない信心があるとしても、それは「不十分な信」ではなく、人間の我執に基づくものであるから、信の装いをもった邪見疑惑ではないか。真実信心が、「如来選択の願心より発起す」と言われ、

「本願力回向の信心なり」と領解されたのは、この推求と聞思によるのである。内観なき信心は、必ず邪心に堕すにちがいない。また、第三・第四に「都て得道の人あることを信せず」「得者を信ぜず」とは、真の善知識を全く信じないということである。いかに道ありと信じていると言っても、善知識に依らざるものは邪心である。三宝を信ずるとも、その常住にして同一なることを信じないものもまた同様に邪心に堕するものであって、それは、「不十分・不完全な信心」ではなく、信心を潜称する邪心であって、あってはならない信心である。信心の装いをもっているだけに、ことはやっかいである。そのような「信不具足」を

是人成就不具足信。（親全一―三〇三）

と言って「信不具足」の文はおわる。

その「不具足信」によって行ぜられるのが「悪果報を獲得する四善事」である。それは第一に

爲勝他故讀誦經典。（親全一―三〇四）

第二に

爲利養故受持禁戒。（同上）

第三に

爲他属故而行布施。（同上）

第四に

爲非想非非想處故繫念思惟（同上）

と示されている。いかに仏教における善事を行じようとも、それが、「勝他」・「利養」・「他属」（他人に取り入る）・「非想非非想処」のためという目的で行なわれるならば、それは、仏道を成就しない。外儀は仏教の相にて、その実「邪見を増長し憍慢を生ずる」（同上）ばかりである。これを、「没し没し已て還て出づ。出で已て還て没す」（同上）

と言う。また、これらは、

行於黒闇生死海、雖得解脱、雑煩悩、是人還受悪果報。是名暫出還復没。（同上）

と示されている。ここに言ってある「解脱」とは、次に示される二種の涅槃の中の、無常なる有為涅槃を指すにちがいない。

如來則有二種涅槃、一者有爲、二者无爲。有爲涅槃无常。樂我常无爲涅槃。有常人深信是二種戒俱有因果、是故名爲戒、戒不具足、是人不具信戒二事。所樂多聞亦不具足。（同上）

と語られている。そこに「有為涅槃」と「無為涅槃」の真偽決判がある。「常人」とは、それをしない者である。また、「非常の言」たる仏教を、「常」の立場・「常」の範疇で心得たり、とする者である。「対仮対偽」の精神なき仏教者である。親鸞はここで「有為涅槃は無常なり。楽我浄は無為涅槃なり。」と訓んでいる。涅槃の四徳は「常楽我浄」である、ということの常識的固定化を許さないのである。さらに、右の「二種の戒」とは、「二種」とは、「有為涅槃」と「無為涅槃」の二種である。すると涅槃が「戒」であるということになる。私は戒ということについて詳しく考察することはできないが、一言すれば、ここで窺えることは、この「戒」とは、条目を以て示されているものではなく、涅槃であるということである。就中、真実の戒は無為涅槃であると示されていることが注意される。この文は前述のように、親鸞が意図して二つの文を繋いだものである。そこに戒についてかくの如く、所謂「仏性戒」と深く関わる言い方がされているのは、注目すべきことである。

この二種の戒が俱に因果ありと信じ、それを「戒」とする者は実は「戒不具足」である。無為涅槃には常人の信ずる如き因果はない。

无因亦无果　无生亦无滅　是名大涅槃　聞者破諸結。（「信巻」所引『涅槃経』文・親全一―一七六）

と言うではないか。無為涅槃は、常人の因果の範疇に入らないのである。したがって「二種の戒俱に因果ありと信ぜ

ん、この故に戒と名く。」と言っても、それは真実ではないから、「戒不具足」である。是の人は信戒の二つの事を具せず、多聞をねがっても、また不具足である。ここから「聞不具足」が三類示される。

第一に如来の所説は十二部経であるが、その中、

唯信二六部一、未三信二六部一。是故名爲二聞不具足一（親全一―三〇三）

第二に

雖三復受二持是六部經一、不三能二読誦一爲二他一解説、无三所二利益一、是故名爲二聞不具足一。（同上）

第三に

受二是六部經一已爲二論議一故、爲二勝他一故、爲二利養一故、爲二諸有一故、持読誦説。是故名爲二聞不具足一。（同上）

と示されている。第二の「利益する所無けん」とは、さらに無利益どころか却って害を及ぼすという危険を孕んでいる。それは「往生の正行を自鄣鄣他する」（親全一―三〇八）ものである。また第三の、「論議」・「勝地」・「利養」・「諸有」の為の故に経を持読誦説する「聞不具足」は、仏教を学ぶ者、如来の法衣を着る者にとって最も厳重な教えである。これを言葉としては知っていても、慚とも愧とも感じないことが問題ではないか。「動機目的はどうであっても、たとえ名利勝他のためであっても、ともかく経典を受持・読誦・解説することは大きな功徳がある」という如き話は決して許されるべきではない。それこそ悪魔・鬼神が、善知識の姿を現して語りかけるものである。我々は、「聞不具足」を「聞が不十分であること」「聞が不完全であること」と領解してはならない。なるほど、十二部経の中の「六部」とあるから、それを「半分」であると考えやすい。しかし、これは、数量のことではないのである。例えば、「一知半解」という言葉があるが、その「半」とは五〇パーセントを意味するのではないのと同様である。

さて、前に「四善事」の文と「信不具足」の文が、前後入れ替わっていると述べた。『涅槃経』では「四善事」の文は「暫出還没」の中の序説であって、それに「信・戒・聞・施・智」不具足が次第して述べられている。それに対

して、「化身土巻」は、「信心為因」に反する「不具足信」によって「悪果報を得る四善事」を行じて邪見増長し憍慢を生ずる故に「戒」（無為涅槃）を具足せず、聞を楽ってもまた不具足であると示される。「聞不具足」は、「論議・勝他・利養・諸有」のための故に経典の持読誦説を行うことを以て結ばれる。この一連の問題は、「信不具足」の文に示されたことが、根底にあると親鸞は領解し、また、「四善事」「戒不具足」「聞不具足」は、一つの連なりを持つと見て、文の順序を入れかえ、離れた二文を繋いで一文にし、文字を改めて、領解を示されたのである。

三

善知識釈における「信不具足」の文から「聞不具足」の文に至るまでを窺ってきた。そこに示されているのは、聞信の名をもった非聞信、仏教の装いをもった非仏教の問題である。

真実の聞信とは、

言聞者、衆生聞佛願生起本末、無有疑心。是曰聞也。言信心者、則本願力廻向之信心也。

（親全一―一三八）

と示され、また、『一念多念文意』に

聞其名号といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をききて、うたがふこころなきを聞といふなり。また、きくといふは、信心をあらはすみのりなり。（親全三・和文篇―一二六）

と示されている。ともに『大無量寿経』下巻の本願成就文についての親鸞の領解である。この真実の聞信に対するものが、「信不具足」・「聞不具足」である。これは、聞信が「不十分」・「不完全」であるということではない。一体、信に完全と不完全があると考えること自体が問題である。たしかに、「一心について深あり浅あり」（「化身土巻」・親全一―二八八）言う所があるが、その「深」は利他真実之心。「浅」は定散自利の心であって、全く範疇を異にするので

ある。これについて決して浅から深へという予測を立ててはならない所である。もし、信心が、不完全から完全へと進化発展するものであるとするなら、その考え方は、百分率で信心を測る如き発想と同軌ではないか。信心が進化発展するかの如く説明するのは、いわば随情の説である。それではいかに、「回心」を語り「転入」を語ろうとも「回」でも「転」でもない。その発想は、人間集団の秩序のためには有効であるかも知れないが、「往生の信心」の事を妨げるものである。すなわちそれでは『歎異抄』の後序や『御伝鈔』の「信心同一論」が成立しないのである。「不具足」を不十分・不完全と解することは、一面きわめて常識的である。しかし、常識や多数が真実であるとは限らない。「信心同一論」は、多数の常識人には不可解である。蓋し、真実の探求者は、往々にして奇人変人と見做されるものである。「億千万衆、時に一人あって能く阿弥陀仏国に生ず。」また、「報の浄土に生ずる者は極めて少し、化の浄土の中に生ずるものは少なからず。」（「化身土巻」所引『往生要集』文・親全一―二七五）とは源信僧都の証明である。

「信不具足」・「聞不具足」とは、聞かず信ぜざるものの問題ではない。自ら聞あり信ありと思っているものの問題である。それは、実は、「専修にして雑心なる者」の問題なのである。すなわち、親鸞は

眞知、専修而雑心者不三獲二大慶喜心一。故宗師、云レ無三念二報一彼佛恩一、雖三作二業行一心生二軽慢一、常與二名利一相應故、人我自覆不三親二近同行善知識一故、樂近二雑縁一自二鄣鄣一他往生正行一故。（親全一―三〇八）

と、「化身土巻」の真門の結釈に示されている。「専修にして雑心なる者」とは、「行は専にして心は間雑す」（真門釈冒頭・親全一―二九五）る者である。その「雑心」の故に、その人は、大慶喜心を得ず、故に宗師（善導）は「彼の仏恩を念報すること無し。業行を為すも軽慢を生じ、名利を相応し、同行善知識に親近せず、往生の正行を自障障他するが故に」と、その所以を示された。ここに、軽慢を生じ、名利と相応し、同行善知識に親近せず、往生の正行を自障障他するそのことは、前の「信不具足」・「四善事」・「聞不具足」を受けて示されているに違いない。そして親鸞は、

悲哉、垢鄣凡愚自二従无際一已來助正間雑定散心雑故・出離・无二其期一。自度二流轉輪回一超二過微塵劫一、叵三

帰二佛願力一、叵三入二大信海一。良可二傷嗟一深可二悲歎一。（親全一―三〇八～九）

と語る。「出離その期無し、自ら流転輪回を度るに、微塵劫を超過すれども仏願力に帰し叵く、大信海に入り叵し。」とは、「四善事」の文を受けている。また、それは『教行信証』「総序」に、

若也此廻覆二蔽　疑網一、更復逕三歴　曠劫一。（親全一―七）

と示されていることを想起させる。そして、

凡大小聖人・一切善人・以三本願嘉號一爲二　己善根一故・不四能三生二信一。不三了二佛智一、不五能四了三知　建三立

彼因一故・无三入二　報土一也。（親全一―三〇九）

と示されている。「雑心」は、「定散心雑する心」であり、さらに「本願の嘉号を以て、己が善根とする」心である。すなわちこれは、大行を自利各別の執心に取り込んで、如来の大行を盗むものである。「無二真実」なる利他の一心に非ず。己の定散自利各別の浅心にて良しとする者こそは、「信を生ずること能はず。仏智を了らず。彼の因を建立せることを了知すること能はず。」と示される。それが、しかも外相には専修念仏を是れつとめているのである。問われるべきは、専修念仏を行ずる「信心」である。「信心」と名のっても我執の変容である。これは聞思推求が欠如している。本願の嘉号を以て己が善根とする者は、その邪心・疑惑の故に「没し没し已て還て出づ。出で已りて還て没す。」（親全一―三〇四）それを、「出離その期なし。」「報土に入ることなし」と示されているのである。その「報土に入ることなし」とは、「信楽釈」に、

一切凡小・一切時中貪愛之心常能・汚三善心一、瞋憎之心常能焼二法財一。急作急修　如三　炙二頭燃一、衆名二雑毒雑修之善一。亦名二虚假諂偽之行一不三名二眞實業一也。以三此虚假雑毒之善一、欲三生二无量光明土一、此必不可也。

（親全一―一二〇）

と言われるように、「虚仮雑毒の善を以て无量光明土に生ぜんと生する、此れ必ず不可なり。」ということと相応じて

いる。「貪愛の心」「瞋憎の心」では、往生不可なのである。この二心が「雑心」を支えている。

「彼の因を建立せることを了知すること」こそ、報土の正定の因たる真実の信心である。名聞・利養・勝他等は、本願発起の因・願心を憶念せず推求せず、果的な現世の利に執する。現世の利の為に、仏教を売る者である。まことに卑劣である。その貪愛・瞋憎の心で、報土に入らんとする、「これ必ず不可なり」と、親鸞は、痛傷せられている。

学仏道の装いの内にある名聞・利養・勝他の心を如実に批判すること。これが、「信不具足」・「四善事」・「戒不具足」・「聞不具足」に明らかにされていることである。それによってさらに、問題が提起される。すなわち、学仏道の装いの内にある功利心を批難し、或は発露懺悔すること全体が、功利心の所現であることが実際にあるという問題である。人間邪心は、したたかである。外相の指弾や外相の懺悔告白は、所謂「免罪符」にはならない。かえって無限に「還復没」を反復し、迷いを深くしていくことになる。仏教を騙り、親鸞を騙って、非仏教化・非親鸞化をますます推進することになる。その反仏教・反親鸞の「邪心」の根を断ち切らねばならないのである。

邪心は邪心の反省・懺悔によって捨離できるほど易いものではない。では、何を以て、その根を切断できるのであろうか。親鸞は、

忻求浄刹ノ道俗、深了ニ知シ信不具足之金言ヲ、永應ニ離タキ聞不具足之邪心ヲ也。（「信巻」菩提心釈・親全一―一三三）

と呼びかけている。「聞不具足の邪心」を離れることは、唯一、「信不具足の金言」を了知すること以外にない。すなわち、「信不具足の金言」にこめられた仏意を深く了知することのみが、「聞不具足の邪心」から離れることを得しめるのではないか。金剛の真実信心を獲得すること以外の懺悔は仮偽の懺悔である。「信巻」信楽釈にも、「信不具足」の文がある。そこには「聞思」と「得道の人有りと信ずること」が示されている。今、親鸞が、「忻求浄刹の道俗」に「深く信不具足の金言を了知」せよ、と示すのは、「仏願の生起本末を聞思せよ」「彼の因を建立せることを了知せ

よ」ということであり、そのためには、人間我執の思索・思案分別をこととせず、偏えに真実の善知識との値遇に依らなければならないということを意味しているのである。

邪心の故の難信を克服することは、真実の善知識との値遇に依らなければならない。これすなわち、善知識釈において、前半の一連の文が「聞不具足」の問題で結ばれた後に、直に、

又言。善男子、第一眞實善知識者所謂菩薩諸佛。（親全一―三〇五）

と説き出され、また、真門結釈の、

以本願嘉號爲己善根故・不能生信、不了佛智、不能了知　建立彼因故・无入報土也。

（親全一―三〇九）

にすぐ続いて、

是以・愚禿釋鸞仰論主解義依宗師勸化、（同上）

とある所以である。「信を生ずることあたはず、仏智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能はざるが故に報土に入ることなし。是を以て、愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勧化に依って、」云々と続いている。「是以」とは、「故に」とか「だから」という意味である。「論主」「宗師」は、

開眞宗念佛、導濁世邪僞。（親全一―二九四）

という仕事を為す人である。これを真実の善知識という。

以下、節を改めて、親鸞の善知識観の一端に触れたいと思う。なぜ「真実の善知識」と言わなければならないのかという問題を中心に考えたい。

四

前述の如く、親鸞は善知識釈に、

一切梵行因善知識・一切梵行因雖二无量一説二善知識一則・已・攝盡。（化身土巻）・親全一―三〇二）

と示す。（これについては、すでにふれたので詳述しないでおく。）また、親鸞は、

善男子、第一眞實善知識者所謂菩薩諸佛。……（中略）……佛及菩薩爲二大医一故名二善知識一。……（中略）……知二諸凡夫病一有二三種一。一者貪欲、二者瞋恚、三者愚癡。貪欲病者、教観二骨相一。瞋恚病者、観二慈悲相一。愚癡病者観二十二縁相一。以二是義一故、諸佛菩薩名二善知識一。善男子、譬如下船師善度二人一故名中大船師上。諸佛菩薩亦復如二是一。度二諸衆生一生死大海一。以二是義一故名二善知識一。（親全一―三〇五～六）

と示している。「第一真実の善知識」は菩薩諸仏なりと示し、その諸仏菩薩が、衆生の三毒の病を治すので「大医」と名け、善知識と名づけると言い、また、「大船師」の如く、衆生をして生死の大海を度したもう故に善知識と名づく、と示している。これは『涅槃経』の引文である。次には、

生二我一如二父母一、養二我一如二乳母一、増二長菩提分一。如三医二療（ママ）衆疾一、如三天灑（シャ反）二甘露一、如三日示二正道一、如三月轉二淨輪一。（同―三〇六）

と、『華厳経』を引いて示している。これは、善知識に遇い、養育を受け、教示を賜ったものだけが言うことができ、またこのように示すことができるのであると思う。親鸞は、「真宗興隆の大祖源空法師」と後序に記す法然のことを憶念していたにちがいない。

親鸞にとっては、法然との値遇ほどに具体的で現実的な善知識との値遇はない。『教行信証』の後序に、親鸞の教学営為の基点を確認して、その値遇を、

然愚禿釋鸞建仁辛酉暦棄雑行専帰本願。（親全一―三八一）

と明記されている。承元の弾圧と法然の入滅をくぐって、値遇の意味をかく確かめたのである。法然との値遇は、浄土宗開宗の仏事との値遇である。その仏事を親鸞は「真宗興隆」と受け止める。その教学営為は、浄土宗を「浄土の真宗」として受けとめた質を開顕することである。

選擇本願は浄土眞宗なり。……（中略）……浄土眞宗は大乗のなかの至極なり。

（『末灯鈔』一・親全三・書簡篇―六二）

といわれる。「浄土真宗」を開顕する営みは、選択本願が大乗の中の至極であることを弾圧下に原理的にも現実的にも開顕することに尽きる。それは、法然との値遇の意味を値遇から外れることなく推求することである。『歎異抄』第二条に

親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしとよきひとのおほせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。……（中略）……たとひ法然聖人にすかされまひらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふろう。（中略・筆者）

と言われている。これを外しては親鸞その人も教学も無い。

また建保二年（親鸞四十二歳）の三部経千部読誦の中止、寛喜三年（親鸞五十九歳）の内省においても、ことの判断の基準は、法然との値遇であることが窺われる。さらに、晩年の書簡には、しばしば法然の名と言葉が出され、例えば建長の弾圧に際しては、「そしるもののために祈れ」という法然の教が示されている。「無義を以て義とす」「愚者になりて往生す」という言葉も、証文として提示せられている。かくの如く、親鸞が晩年に至っていよいよ法然のことを憶念し、書簡の中に証文としてその言葉を記しているということは、決して、老境に入った人の感傷というように見て済ますことはできない。法然との値遇は、個人の感傷に取り込むべからざることなのである。法然の仰せが、

暗まされることは、すなわち浄土真宗の法が暗まされることと同一なのである。その基点がおろそかにされた時、一切は形骸化し崩壊する。例えば、親鸞は書簡に、

この世の念佛の義は、やう〳〵にかはりあふてさふらふめれば、とかくまふすにをよばずさふらへども、故聖人の御をしへをよくよくうけたまはりておはしますひと〴〵は、いまももとのやうにかはらせたまふことさふらはず、世かくれなきことなればきかせたまひあふてさふらふらん。浄土宗の義みなかはりておはしましあふてさふらふひと〳〵も、聖人の御弟子てさふにらへども、やう〳〵に義をもいひかなどしへて、身もまどひ、ひとをもまどはかしあふてさふらふめり。あさましきことにてさふらふなり。（『末灯鈔』十九・広本『御消息集』三）

と記し、また、

京にもこゝろえずしてやう〳〵にまどひあふてさふらふめり。くに〴〵にもおほくきこえさふらふ。法然聖人の御弟子のなかにも、われはゆゝしき学生などゝおもひあひたるひと〴〵も、この世には、みなやう〳〵に法文をいひかへて、身もまどひ、ひとをもまどはして、わづらひあふてさふらふめり。

（『末灯鈔』二〇・広本『御消息集』一・建長四年・親鸞八十歳）

と記されている。親鸞はこのような妥協と転向の状況を眼前にして、師教聞信以外に存るべきようのない精神を公開しているのである。法然は親鸞にとって、まさに「日の正道を示すが如」き意味をもつ人であった。

善知識との値遇は、仏道の死活を決定するきわめて重大なる問題である。前述の如く、「化身土巻」の善知識釈にはまず『大経』流通分の文を挙げて、その中に

遇二善知識一聞二法一能行　此亦為二難一。（親全一―三〇二）

と、善知識に遇い法を聞き能く行ずることの難が示されているが、さらに注目すべきは、その五難を承けて、

是故我法・如二是一作。如二是一説。如二是一教。應下當信順如二法一修行上。（同上）

とあることである。五難は機の歎きではなく如来の見そなわしたもう所である。如来はその五難を知らしめして、その故にこそこの本願の御法を是の如く作し、是の如く説き、是の如く教えたもう。故に一切衆生よ、まさに信順して法の如く修行すべし、と示される。そのような如来こそが「第一真実の善知識」である。このことを知る人は、如来出世の本意を知る人である。親鸞は、『華厳経』入法界品によって、

如來大慈悲出現於世間、普爲諸衆生轉无上法輪。如來无数劫勤苦　為衆生。云何諸世間能報大師恩。（親全一―三〇七）

と語っている。かくの如く感知する人においてこそ「難信」・「難遇」を語り得るのではないか。すなわち、真の仏弟子のみ、「難信」・「難遇」を実感もし語ることもできるのであって、然らざる者が、それを語る時には、必ず往生の道を自障障他することになるのである。

「信巻」真仏弟子釈に

有諸菩薩復作是言我於因地遇善知識誹謗波若堕於悪道、逕无量劫雖修余行未能出、後於一時依善知識邊教我行念佛三昧其時即能　併遣諸鄣方得解脱。有斯大益故願不離佛。

（親全一―一四六）

と語られている。我は昔、善知識に遇って波若を誹謗して悪道に堕して無量劫、出づること能わざりき。解脱を得たのはひとえに善知識仏陀の御教による。故に願じて仏を離れず、と表白しているのである。これは、仏弟子なればこそ言い得たことばである。獲信の故に難信を知るのであり、そこに、知恩報徳も大慶喜心もある。

五

さて、右の文のはじめの「善知識」の語は誤記であって、正しくは「悪知識」ではないか、と疑問を懐かれる人も

いるはずである。これは従来、真蹟坂東本『教行信証』の誤りではないかと見做されて『安楽集』の原文に戻して、「悪知識に遇うて波若を誹謗して悪道に堕しき」と読まれることが多かった所である。それによって意味は通じやすくなる。また、専修寺本・西本願寺本でもこの「善知識」の「善」の字について疑問を示している。或は、単純な写誤かも知れない。しかし、そう決定するには、よほどしっかりした根拠がなければならない。我々の都合で、我々にとって文意が通じるか否かだけを基準にして、引用の原文に照らし、諸の注を参照して、それを以て写誤であると判断を下すことは問題があろう。そこで、今の問題であるが、此処は坂東本通りに「善知識に遇うて波若を誹謗して悪道に堕しき」と読んで行きたい。そこから、親鸞の善知識観の一端を探りたいと思う。

まず、そのように考える理由を一つ挙げたいと思う。「化身土巻」の末巻に、『首楞厳経』を引いて、次のように示されているのである。

我滅度後末法之中多ニ此魔民一多ニ此鬼神一多ニ此妖邪一熾ニ盛世間一爲ニ善知識一令ニ諸衆生落ニ愛見坑一失ニ菩提路一
誑惑無識恐令失ニ心一所過之処其家耗散成ニ愛見魔一失ニ如來種一。（親全一―三五六）

「魔民・鬼神・妖邪が善知識となって諸の衆生をして愛見の坑に落し、菩提の路を失せしめ誑惑して認識力を無くし、心を失わしめ、如来種を失せしめる」というのである。この「善知識」こそ「波若を誹謗せしめる善知識」である。このことは同巻の『起信論』の文と深く関わっている。すなわち

或有ニ衆生一無ニ善根力一則爲ニ諸魔外道鬼神一所ニ誑惑一。若於ニ座中一現ニ形一恐怖。或現ニ端正男女等相一。……
（中略）……或現ニ天像菩薩像一亦・作ニ如來像相好具足一若説ニ陀羅尼一若説ニ布施持戒忍辱精進禅定智慧一或説ニ平等空无相無願無怨無親無因無果畢竟空寂是真涅槃一。……（中略）……能令ニ衆生貪ニ箸世間名利之事一。又令下使ニ人数瞋・数喜一性无常淮上反。（親全一―三五九・中略筆者）

とある。諸魔・外道・鬼神等が、端正なる男女の相・天像・菩薩像・如来像を現じて、衆生をして世間の名利の事に貪著せしめ、その性を無常のならいならしめると、示されている。先の『首楞厳経』の文と同じ様に、魔や鬼神が菩薩・如来の姿を現じて衆生をして菩提を失わしめることが示されている。その魔や鬼神が変現して善知識の姿をとって、波若を誹謗させ、それ故に衆生を悪道に堕さしむるのである。たしかに、善知識に遇って波若を誹謗して悪道に堕すということは、一見矛盾を感じることであるが、前述の『首楞厳経』・『起信論』の文に照らせば、このような表現が、決して間違いでないことが肯けようと思うのである。善知識と言っても、この場合には魔や鬼神が姿を変えた善知識を意味するのである。

我々は、その人が悪知識であるとあらかじめ知っていれば、誑かされたり欺されたりすることはない。我々が誑惑されるのは、その人を善知識だと思っている時である。故に親鸞は、わざわざ『安楽集』の字を「悪」から「善」に改めて、「善知識に遇うて波若を誹謗して悪道に堕しき」としたのではないか、と思うのである。あるいはこれを、「(せっかく) 善知識に遇ったのに波若を誹謗したため悪道に堕した。後に善知識に遇って (今度は) 念仏三昧によって解脱を得た。」と解釈する人があるかも知れない。私は、そうではなく、(魔・鬼神が化けた) 善知識に遇い (その教により) 波若を誹謗して悪道に堕した。後に (真の) 善知識に遇い念仏三昧によって解脱を得た、と読みたい。善知識釈と真仏弟子釈の関わりを注意したいのである。また、親鸞の「対仮対偽」の姿勢を学んで行きたいと思うのである。

善知識釈に

善男子、第一眞實善知識者所謂菩薩諸佛。世尊、何以故。常以三種善調御故。何等爲三。一者畢竟軟語。二者畢竟訶責。三者軟語訶責。以是義故。菩薩諸佛即是眞實善知識也。(親全一—三〇五)

と示されている。「信不具足」「四善事」「聞不具足」等に示される所の、仏教の装いをもって行なわれる非仏教化の

問題を承けて、「第一真実の善知識は菩薩諸仏なり」と示されるのである。私は、如来が、わざわざ、「第一真実の善知識」・「真実の善知識」と説かれなければならなかった理由があるに違いないと思う。この世には、真実ならざる「善知識」があまりに多く、「如来の子」（「信巻」・親全一―一七六）たる衆生を彼らは現に悩ましたぶらかし誘い、菩提を失わしめているのである。如来大悲導師は、決してそれを静観ないし傍観していることはできない。故に、「第一真実の善知識は菩薩諸仏なり」と説いて、真実ならざる善知識と真実の善知識を決判して、非真実の善知識に決して依る勿れ、と示されたのである。前掲の「信巻」真仏弟子釈の文の後半に、

後於二一時一依二善知識邊一、教二我一行二念仏三昧一。其時即能併遣二諸鄣方得二解脱一。有二斯大益一故、願不二離二仏一。（親全一―一四六）

という「善知識」は、「真実の善知識」のことである。「願じて仏を離れず」と結ばれることからも明らかである。「善知識」には真実と不真実がある。この問題を、親鸞は提起しているのである。

然し、我々には、真実の善知識とそうでないものとの決判が容易ではない。例えば、「信巻」に

一切知見得二自在一定畢竟修二習清浄梵行一常為二无量无辺衆生一演二説无上涅槃之道一。（親全一―一五五）

また、

一切知見憐二愍衆生一、猶二如赤子一。已離二煩悩一能抜二衆生三毒利箭一。（親全一―一五七）

という言葉がある。これは誰のことを言っているのか。前者は富蘭那・後者は末伽利物腴梨子のことである。六師外道である。私には右の言葉のみを見ただけでは、これは真実の善知識ではないと決することは不可能である。このことは、一つの示唆を与える。言っていることが同じようなことであったとしても、それ故に真実の善知識であると判断することはできない、ということである。我々は、常に諸魔・外道・鬼神に誑惑されるような危い状態にある。それ故に、親鸞の「対仮対偽」の姿勢に学ばなければならないのである。

『愚禿鈔』に

常随ニ悪友一者悪友者対ニ善友一、雑毒虚假之人也。言ニ无人空迥澤一者　悪友也。不ニ値ニ眞善知識一也。

真言対ニ偽一ノ善知識者対ニ悪知識一也

眞善知識　正善知識

實善知識　是善知識

善善知識　善性人也

悪知識者

假善知識　僞善知識

邪善知識　虚善知識

非善知識　悪善知識

悪性人也　（親全二・漢文篇―四五）

と示されている。これは、善導の「二河白道の譬喩」の中、合喩段の

言ニ無人空迥澤一者、即喩下常随ニ悪友一不レ値中眞善知識上也。（親全九―一八四）

という文についての領解である。「無人空迥」とは、常に悪友に随って真の友にあわないことである。そして「真の善知識」について、まず、「真の言は、仮に対し偽に対す。」と示し、「善知識は悪知識に対するなり。」と示されている。ここに「対」とはただ対語というに止まらない。これは親鸞の生き方になっているのである。親鸞の「対決」の姿勢を我々は忘れてはならない。この仮に対し偽に対することが「真」なるものの働きである。また悪知識に対していく人こそが、善知識である。親鸞の学の方法が「聞思」であると言った時には、それが「対」を内容としていることを忘れてはならない。「信巻」真仏弟子釈にも「真の言は仮に対し偽に対す」とある。この「対」の姿勢をもった

「聞思」が、真仮偽批判や信疑決判を明らかにするのである。

今、善知識は「真善知識」・「正善知識」・「実善知識」・「是善知識」・「善善知識」と示され、「善性の人なり」と結ばれるが、これに対して露わになる「悪の知識」は、右の善知識の確認に対して、「仮善知識」・「偽善知識」・「邪善知識」・「虚善知識」・「非善知識」・「悪善知識」と示され、「悪性の人なり」と結ばれている。いずれにも、傍点したように「善」の字がある。すなわち、それらの外相は「善知識」なのである。前にふれた「波若を誹謗せしめる善知識」・「悪魔・鬼神・妖邪が化けた善知識」を親鸞が示す視点は、『愚禿鈔』のここにある。我々は、「善知識」とあればすべて真実の善知識であろうとする如き見解に安逸を貪っていてはならない。「対仮対偽」を知らざるによって、如来広大の恩徳を迷失するのである。群賊悪獣は「仁者、かえり来たれ。我等すべて悪心をもって相い向うことなし」と、甘言を以て呼びかけている。その声に動乱破壊せられざる金剛心とは、「対仮対偽」の心である。この人を、金剛心の行人、唯信仏語の真の仏弟子という。真実の善知識に遇い得た人こそ真の仏弟子である。そしてこの真の仏弟子こそは、衆生を悞らざらしむ人である（「信巻」所引・善導「深信釈」参照）。真実善知識とは、悪知識たる「仮偽邪虚非悪の善知識」に対する存在であり、真仏弟子も「仮偽の仏弟子」に対する存在である。

真実の善知識に依ることによってのみ、「信不具足」・「聞不具足」を知らされ、それを敢然と突破することを得る。それは、真の仏弟子たるものの責任に属することである。真実善知識が、本願の鏡である。真実善知識無二亦無三、と明記したい。真宗念仏を開いて濁世の邪偽を導く、これが真実善知識である。

親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしとよきひとのおほせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべらん。また地獄におつべき業にてやはんべるらん。惣じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまひらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらう。（『歎異抄』第二条・蓮如本）

この言葉に、親鸞は徹底した人である。そこに、学仏道としての真宗学の基点がある。これを外した時、真宗の学は、親鸞が「総序」においていましめた「遅慮」に堕するに違いない。

はなはだ散乱し粗雑なまま、拙文を結ぶ。問題は山積し、疑問が多いと思う。御叱正を乞う。また、時間も紙数も尽きて、註も省略せざるを得なかった。御寛恕を乞う次第である。